
でいり～らいふう

赤神 裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいり〜らいふう

【Nコード】

N5004R

【作者名】

赤神 裕

【あらすじ】

僕の周りに起こる様々な出来事。そのほとんどは僕の想像だが……。それでも僕は成長していく(?)

僕の平凡で想像豊かな日常を描いた、ありそいで面白い(?) コメディ系小説です!!

杏仁豆腐は僕の嫁ッ！！（前書き）

どうも、赤神 裕です。

コメディ系の小説が書きたくて投稿しました。
連載と書いてありますが、ストーリー性は全くと言っていいほどありません。

まあ、シリーズものって感じですね。
ですがあらすじは一つにまとめたかったので、あえて連載の方になりました。
予めご了承ください。

コメディと言いつつも、多少のファンタジーが組み込まれており、
擬人化させたキャラクターがどんどん出てきます。はっきり言えば
厨二病入ってますね（苦笑）
そっこのが苦手な方は注意してください。

それでは、初の試み。

コメディ小説「でいり〜らいふう」第一回をお楽しみください。

杏仁豆腐は僕の嫁ッ！！

「きゃあああああああああああ、無いいいいいいいいい！！！！」

ある日、僕は冷蔵庫を開けて甲高い悲鳴のようなものをあげた。僕の家の冷蔵庫は誰がどこに何を入れるか大体決まっている。このように分担しているのはおそらく僕の家だけだと思う。というのも、この話を持ち出すと皆が笑って転がる……。いや、表現を間違えた。笑い転げるのだ。他家では、自分専用の冷蔵庫を持っているという人がいるものの、やはり一つの冷蔵庫に陣地を作っている家庭はないようだ。何度も同じこと言うけれど、僕の家ではこれが当たり前なんだ。だいぶ話がそれってしまった。元に戻そう。

僕が悲鳴を上げたのは先ほど話したことで察しがつく人もいるであろうが、僕の陣地からとあるものが消えていた。それは――

杏仁豆腐だった。

僕にとって杏仁豆腐は一番の味方であり、一番幸せにしてくれる相棒なのである。へ、変人とか言うなよ？　つまり、杏仁豆腐が大の大大、大、大好きなのだ。そんな僕の気持ちを知ってるかどうかは分からないが、僕の杏仁豆腐を奪った奴は本当に許せなかった。僕は消えた杏仁豆腐を補充するために近くのコンビニへ行った。

コンビニに着くと真っ先にデザート売り場を見る。杏仁豆腐の値札が目にとまり手を伸ばそうとするが、そこで僕の動きは静止した。なんということだ。杏仁豆腐がなかった。売り切れだったのだ。僕

は頭を抱えて低く唸った。

僕は今、両手に銃を持ち原っぱを駆けている。前には大きな檻がぶら下がった飛行機が飛んでいる。僕はそれを追いかけているのだ。

「助けて〜」

檻の中から声が聞こえる。杏^{あん}仁^{にん}だ。杏人は檻越しに僕に助けを求めていた。

「まっててね。今助けてあげるから!!」

僕は銃を構えて飛行機の翼を狙う。見事命中したのか、飛行機が大きく揺れて少し高度が下がった。飛行機が旋回してこちらを向く。マズイ、このままでは撃たれてしまう。飛行機の操縦席にはプクプクと太った、いかにも甘い物好きそうな男が乗っていて、僕を見降ろしていた。飛行機の両脇についている銃から弾が発射される。と同時に嫌なにおいが漂い始めた。

「うわあ、これって……。ギンナンか!! やめろお、僕はギンナンが嫌いなんだよおおおツツツ!!」

デブが勝ち誇ったように笑っている。辺りから泣き声が聞こえた。女の子の声だ。もしかしてこのギンナン弾が当たったのか!? 僕は辺りを見渡して声の主を探した。すると、ヴッ!! 黄色くて丸いものをかぶった女の子が泣いていた。これは見るからにギンナンである。

「どうして私を嫌うの？ 臭いからなの？」

そんなこと言われても嫌いなものは嫌いである。僕は少しづつ後ずさりしてその場から逃げようとした。しかし、ギンナンが近付いてきて僕にすがりつく。

「お願い、見捨てないで！！」

やめろ、やめろ。服が臭くなる。杏仁がどんどん遠ざかっていく。くっそー。僕は杏仁を救えなかったのか。肩を落とすと目の前のギンナンが目に入った。そしてまじまじとその身体を見る。

「や、そんなにジロジロ見ないでよ……。はずかしいよう」

そうか！！ 奴はギンナンを飛ばしてきた。ならばこちらからもギンナンを飛ばせばよい。僕は大砲を想像すると、パツとそこに砲台が現れた。これでいい。僕はギンナンを大砲にセットさせると、臭くて嫌だったが、ギンナンにしがみついた。

「そ、そんな、急に……」

「発射！！」

「え……？」

ズドンと大砲から僕とギンナンが勢いよく飛び出した。飛行機に向かって一直線に飛んでいく。

「いやあああああ、あつついよおおおおおお」

ちよつとまで、まで。僕がしがみついていたのにギンナンが僕にしがみついている。これじゃあ逆、逆！！　そう思っていると檻の繋がっている縄の上にたどり着いた。なんだかんだで作戦は成功したわけだ。僕は縄をナイフで切ると檻をぶち破って杏仁を脱出させた。そしてそのまま三人は下におちていく。水の中にドブンと入ったが、ギンナンと杏仁のおかげで上へと浮かんだ。ギンナンが臭くなかった。大砲で熱せられたのと、急激に冷やされたので、匂いは吹き飛んでしまっていた。これならギンナンも好きになれそうだ。

気がつくと周りの視線が妙に刺さった。みんながこちらを見ている。僕は恥ずかしくなつて店を飛び出して行つた。

家に着くとお姉ちゃんがいた。よく見ると杏仁豆腐のカップをもっている。あんただったのか！！と思っていると、お姉ちゃんがニヤツと小悪魔な表情をした。僕はお姉ちゃんにくつてかかろうとする。

「今日の夜ごはんはギンナンの炒め物だつてよ？」

そんなものに引つ掛かる僕じゃない！！　僕はギンナンを克服したのだ。そう思っているとお姉ちゃんが奥へ行こうとした。

「までまでまでえい。あのデブはお姉ちゃんだったのか！！」

つい口が滑ってしまった。ちなみにお姉ちゃんは太ってなどいない。さっきの想像上デブが出てきたのでそう言ってしまったのだ。

そのあと僕がボロボロにやられたのは……………

言うまでもない。

ちなみに、結局ギンナンは味の方がダメで全く克服できていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5004r/>

でいり～らいふう

2011年10月8日16時11分発行